



## 長者町のエネルギーと戦後復興

八木兵は、父が昭和15年に中区の東陽町で創業しました。私が生まれたのはその2年後ですが、当時は戦時下で商売をやるような環境ではなかったですね。住まいも空襲を避け市内を転々としていました。

戦後、縁があって長者町に移ってきました。当時の名古屋は焼け野原で、うちの会社から名古屋駅が見えました(笑)。老舗の経営者たちは、戦後すぐには動き出しません。きょうの生活の糧を必要とする人たちが、比較的土地を入手しやすかった長者町に集まったそうです。だから、当時このまちは復興のエネルギーに満ちていました。父が事業再開の場所に長者町を選んだのは、それも理由だったようです。

## とにかく「前向きにやる」

私が大学を卒業して東京の日本橋で修行して名古屋へ帰ってきたのは、東京オリンピックの翌年。高度成長が始まるうというときです。そのころ痛感したのは、東京に比べ名古屋の活気のなさ。当時のうちの店舗の規模は、東京で働いていた店の3倍。それなのに売り上げは一緒。お見えになるお客さんも少ない。東京と名古屋では、市場のスケールがぜんぜん違うのです。そういうハンディを乗り越えるため、いろんなことに取り組んできました。ポイントは「お客さんを大切にすること」と、とにかく「前向きにやる」ということです。

平成14年から名古屋長者町織物協同組合の理事長になって、まちづくりにも取り組むようになり

# ビジネスも まちづくりも 変化の中に チャンスがある



あいちトリエンナーレ2010  
長者町会場推進会議 会長

山口兼市さん

織物卸商社の八木兵社長。昭和17年、名古屋市長。明和高校、麗澤大学卒業。昭和43年、八木兵取締役。同53年、社長に就任。名古屋ニットファッション卸商業組合理事長、名古屋長者町織物協同組合理事長、錦二丁目まちづくり連絡協議会会長。



トリエンナーレの主要な会場となっている長者町

ました。重視したのは組織が前向きにチャレンジすること。商店街で「あびす祭り」を始めるときもそうです。もともと問屋街なので、一般の人が集まるような祭りをやっても商売にプラスにならないという声は、けっこうありました。今でもそうです。

でも従来のビジネスの形が、いつまでも続くわけじゃない。問屋さんをやっている人も、小売り屋さんにも替わるかもしれない。だからもっとオープンに人が集まるようにして、変化の中に前向きにチャンスを見つけていくしかない。私はそう考えています。

## トリエンナーレで、まちの価値づくりを

そういう中で、長者町を「あいちトリエンナーレ2010」の会場にしたいという話を愛知県からいただいた。産業からソフトへというのは、先進国のまちづくりの流れです。パリは芸術があるから人が集まる。まちづくりで大切なのは「そこへ行く価値」をつくることです。価値あるまちへ行けば、人は少々高くてもモノを買う。まちの価値が、ビジネスの価値にもつながっていく。

トリエンナーレは大きなチャンスだと思います。これを継続していけば、まちにいろんなものが芽生えてくる。ここで新しいことに挑戦したいという若い人も入ってくる。私たちもトリエンナーレを活かす努力をしなければならないと思います。

## 私のお気に入りの場所

### 千種スポーツセンター

地下鉄東山線・東山公園駅と星ヶ丘駅の間、青い丸屋根の「千種スポーツセンター」があります。東山公園駅から千種スポーツセンターに歩いて行く途中、右手には東山動植物園の森。森の中には、ゴンドラやスカイタワーがそびえ立ち雄大であり、左手には大きな池と平和公園が広がっており、開放感を感じます。途中に外野の狭いグラウンドがあり、リトル野球の密度の濃い練習が繰り返されています。マラソンや散歩途中の人が足を止め、練習に見入っています。グラウンドを過ぎるとスポーツセンターに到着。自分も一汗かくかという気分。町中にあり、これだけ広々とした空間の中で老若男女がそれぞれのトレーニング目的に合ったスポーツを楽しむ。心身のリフレッシュに最高の場所です。

名工建設 経営企画本部  
山田晃生さん

